

# 大和高取城に関する文献史学的研究

金松誠

## はじめに

大和高取城に関する文献史学的研究は、戦前からいくつかなされてきた。しかし、それらは伝承や二次史料に依拠しているものが多く、またそのため各氏によって見解が異なっている。そこで、本稿では一次史料を悉皆的に収集した上で、それを最優先し、二次史料は史料批判した上で補助的に取り扱うことにより、この問題に取り組む。

第一章では中世における高取城の変遷と各時期ごとの役割について考察する。第二章では織豊期における高取城の変遷について考察する。第三章では第二章での成果を基に織豊期における各時期ごとに高取城が担った役割を考察する。

以上の考察によって高取城の実態に迫る。

なお、本稿での考察対象時期は慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦の前までとし、それ以降に関することは触れない。

## 第一章 中世における高取城の変遷と各時期ごとの役割

本章では中世高取城の変遷を考察する。ここでは高取城だけでなく、中世高取城主越智氏の拠点城館である越智

城・貝吹山城などの関連を視野に入れて、通史的に考察を行う。

越智氏の拠点城館の史料の初見は永享四年（一四三二）の越智城と壺阪寺である。

両者の関係は、相対的に越智城が平時的な場として、壺阪寺が詰城的な場として存在していた。また、壺阪寺は吉野へ逃れた際の復帰の拠点ともなっていた。

なお、越智城と壺阪寺は応仁の乱頃において、西軍の大和の拠点的役割を担っていた。

十六世紀以後、両者の記述は、越智城は永正三年（一五〇六）、壺阪寺は永正八年・永禄六年（一五六三）以外には見られなくなる。

そして、永正八年に高取城が史料に現れる。古市・筒井・十市氏の山ノ城より早く出現した要因は、国人としての最盛期を大和五大国人の中でも早く迎えたことが、その一つとしてあげられる。

高取城は、当初領域支配のために築かれたものというよりはむしろ、相対的に戦時を意識した山城であったものと思われる。そして、以前同様敗れたら吉野へ逃げて復帰の機会を窺うことを念頭に入れていたのであろう。

天文年間に入ると、大規模な山城に発達してただけでなく、有力国人に依拠して大和支配を維持しようとしていた興福寺にとって重要な政治的地位を占めるほどの山城へと発展する。

そして、高取城は天文年間半ば頃には筒井氏・十市氏の「山ノ城」同様に、居館の詰城という枠を越えて、広域の勢力圏全体に越智郷全体の詰城として、行政的な機能も備えた居城という段階にまで発展していったものと思われる。

天文十五年（一五四六）に史料に現れる貝吹山城との並存期には、高取城の占めるウェイトが低下し、立地的に領域支配に適した貝吹山城の方が、より拠点としての性格を帯びていったものと思われる。そして、この並存関係は越

智氏家中の対立とも無関係ではなく遅くとも永祿期後半以降、惣領の民部少輔家高が高取城、庶流の伊予守家増が貝吹山城、というように惣領と庶流が別々の山城を拠点としていた。この段階では、両城は相互依存関係にはなく、また、貝吹山城を拠点とする庶流の方が、惣領よりも力を持っていたと思われる。しかし、永祿十二年（一五六九）十月までに民部少輔が松永方となり、十一月に松永方が伊予守から貝吹山城を奪取した際、民部少輔もその戦に大きく関わっている。これにより、民部少輔が貝吹山城を預かっただと思われ、一時期惣領に権力が集中したものと考えられるが、元龜二年（一五七二）に、伊予守の手により、民部少輔は高取城において、生害するに至った。

そして、天正八年（一五八〇）の織田信長による大和一国破城により、高取城も例にもれずに廃された。

以上、越智氏段階の高取城は、当初は軍事的な性格が強かったが、その後、平時・戦時を問わず、越智氏の領域維持・支配のための政治的・軍事的拠点としての役割を担っていった。しかし、貝吹山城との並存期には、貝吹山城の方が拠点として中心的な役割を担い、高取城の占めるウエイトは低下していく。

そして、天正八年の信長による一国破城により廢城を迎えたのであった。

以上が中世における高取城の変遷と各時期ごとの役割に関する考察である。

## 第二章 織豊期における高取城の変遷

織豊期における高取城の変遷を考察する。ここでは特に、城主の変遷を中心に通史的に考察する。

天正十二年（一五八四）二月上旬、筒井順慶により松蔵弥八郎のもとに、高取城が復興する。おそらく羽紫秀吉の

関与があつたものと思われる。

同十三年閏八月十九日、筒井定次の伊賀国替により、高取城は大和国の領主を仰せ付けられた羽柴秀長に渡される。その時脇坂安治が、実際に秀長が大和入国を果たす九月中旬までの間、引継役程度で高取城主（城代）になった可能性がある。

そして脇坂の後、天正十六年九月に本田武蔵守が秀長家臣として確認されるまでの間か、遅くとも同二十年にその息本田因幡守が吉岐風本城代として朝鮮役の間赴くまでの間に、本田武蔵守・本田因幡守が高取城主になったと思われる。脇坂が去つた直後に本田氏が入城したのか、それともその間に他の誰かが高取城主になったかどうかは明らかにすることはできない。

### 第三章 各時期ごとに高取城が担った役割

織豊期の高取城は、政治的には、筒井順慶・筒井定次が郡山城主の時期においては、その家臣が高取城の管理等を担っていたと思われることから、高取城は郡山城の属城として捉えることができる。

羽柴秀長・羽柴秀保が郡山城主の時期において、豊臣政権武家官位制の論理上、「武家清華家」であつた秀長・秀保は高取城主の本田武蔵守・因幡守を自らの諸大夫としていた可能性が極めて高い。すなわち、高取城も郡山城の属城として位置付けることが可能である。

そして、文祿四年（一五九五）に「武家清華家」の資格ではない増田長盛が郡山城主となつた段階で、本田因幡守

は豊臣秀吉直属の諸大夫となり、独立した大名となった。それに伴い、高取城も政治上単独の本城として機能していったものと考えられる。

機能的役割としては、郡山城の詰城としての役割を果たしたことも考えられるが、基本的には一貫して、特に大和盆地南部・吉野方面で未だくすぶり続ける反乱分子の大和国衆を一掃するための拠点としての役割を担っていたといえる。

### おわりに

以上の検討により、高取城の変遷、各時期ごとの役割がある程度鮮明になった。

越智氏の段階は、当初は軍事的色彩が強かったが、その後は越智氏の領域維持・支配のための政治的・軍事的拠点としての役割を担った。

一方、織豊政権下の段階は、基本的には一貫して、織豊政権による大和盆地南部・吉野への支配を浸透させるための拠点としての役割を担った。

すなわち、同じ高取城でも大和の一人国である越智氏の段階と、織豊政権下における段階とでは、領域支配のための拠点として高取城が機能していたという点では共通しているといえる。しかし、領主レベルにおいて、その目指すところ・度合いについては決定的な差が見受けられた。

〔追記〕

修士論文は「大和高取城」(城郭談話会、二〇〇一年十一月)に執筆した同題目の論文を一部改稿したものである。